

編輯顧問  
倉橋惣三  
と  
キンダーブック

7

「犬」を主題にした観察絵本

浜口順子  
(大学教員)

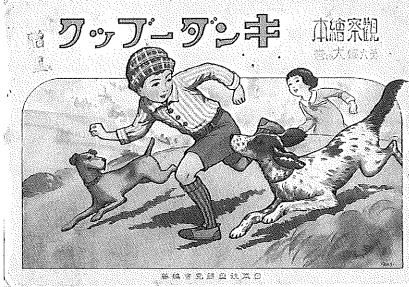
「犬の巻」(第一輯第六編 一九二八(昭和三)年十一月)

先の号でも書いたのだが、昔のキンダーブックを見てみると、子どもの傍らになぜかよく「犬」がいる。今回はその「犬」を主題にした八十五年前のキンダーブック(昭和三年十一月発行)

を一緒に読んでみたい(画像1は表紙)。フレイベル館の書庫に所蔵されている号には、解説のページが散逸せずに残っていた。編集委員山田三郎は、その「編輯余談」の中で次のように記している。

「犬」を主題にした観察絵本は、本書が日本嚆矢です。外国にはその例がないことはありません。しかし本篇ほど豊富な集成と、正確な資料を以て生まれたものは外国にも見当たらないので、本書は『世界一』の犬の絵本だと、顧問の岸邊先生が折<sup>注1</sup>り紙をつけてくださいました。」

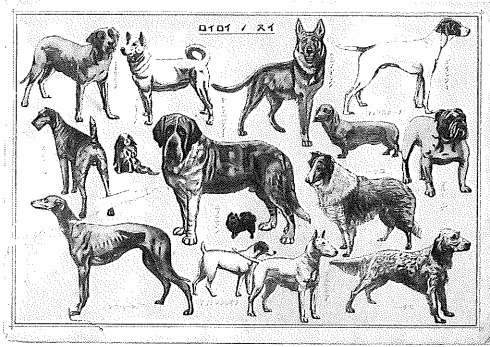
キンダーブックは各号のテーマに関連した専門家が監修を務めるが、



▲画像1「犬の巻」表紙 (的場朝二画)

浜口順子(はまくちじゅんこ)  
お茶の水女子大学大学院教授。

この「犬」の号の監修は高橋虎雄という人だ。山田は、「皆様とうにご承知の、日本一の『犬』の研究者」と紹介している。



▲画像2「イヌ ノ イロイロ」(十亀廣太郎 画)

### 「犬」のいろいろ

最初のページで、十五種類の犬が紹介されている(画像2)。高橋虎雄は「日本には、もともと犬の種類が少なかった為でありましょうか、これまで児童の絵本で、正確に犬の種類や特質を描きわけて示したものはほとんどありませんでした。」と解説している。

右上から横へ…ポインター、ウルフドッグ、秋田犬、土佐犬、

二段目…ブルドッグ、ダックスフント、セントベルナード、テン、エ  
アデール、

三段目…コリー、ポメラニアン、

下段…セター、ブルテリア、フォックステリア、グレーハウンド。

飼い犬として今一般的なチワワやトイプードル、柴犬、ラブラドルなどは含まれていない。

### 「イヌコロ」の詞とメロディーの提供

西條八十の「イヌコロ」という詞に寄せて、母犬の周りで五匹の子犬が乳を飲んだりじゃれ合ったりしている様子が描かれている(画像3)。解説の中に、この歌の楽譜が載っている(伴奏譜付き)。四分の四拍子のゆったりした明るい曲調で、幼稚園などで実際に子どもと楽しんで

歌えるように作られたのだろう。

カアサンノワンワンコドモノワンワン  
ソロッタソロッタヒナタニソロッタ  
アノコニノマセテコノコヨシヤブツテ  
セワシイワンワンカアサンノワンワン  
オッパイノンダラボクラトアソボウ  
アカシロクロブチコドモノワンワン

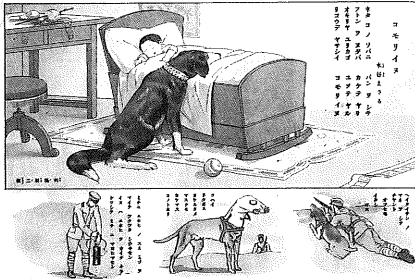
人のために働く犬たち

軍用犬、子守り犬、猟犬など、人間社会に貢献する犬が、(次に紹介する伝説の犬も含めると)全体の三分の一ほどのページを占めて紹介されている。

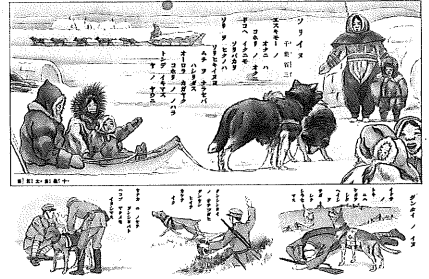
まず、画像4上のそり犬。「エスキモーのお国は氷のお国。どこへ行くにもそりばかり。そりを引くのはそり引き犬よ。むちを鳴らせば、走り出す。オーロラ輝く氷の野原、とんでいきます、矢のように」(千葉県三)。画像5上は、子守り犬。「寝た子のそばに番をして、布団を脱げばかけてやり、起きりゃゆりかごゆってやる。りこうでやさしい子守り犬」とある(水谷まさる)。下段は、見開き左右続きで、戦地で活躍する犬たちが



▲画像3「イヌコロ」(的場朝二画)



▲画像5「コモリイヌ」(的場朝二画)



▲画像4「ソリイヌ」(十亀廣太郎画)

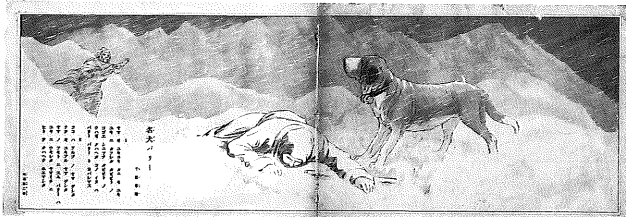
コマ割りで描かれている。負傷兵の存在を知らせたり、電線隊で電線を引っ張ったり。伝書鳩を運んだり、匍匐する兵士の横で伏せておとなしくしたり、臭気線を嗅いで道案内をしたりするなど、犬の有能さには驚かされる。危険な戦地のことだが、毒ガスマスクをする犬の説明文には、不謹慎とは思いつつ、ユーモアを感じてしまう。「こわい毒ガスよけるため、マスクもかけます、このとおり」。全部ではないが、七五調の文章になっている箇所が多く、それが深刻な内容にも軽妙さを加えている。

そのほか、「犬の曲芸」が舞台上上演されるのを、幼稚園の子どもたちや先生が楽しんで見ているという絵もある。現代では、動物愛護精神の見地から、見られにくくなった光景であろう。

## 伝説の犬たち

私の子どもころ（昭和四十年代）は、名犬ラッシーや名犬ロンドンなど、生活の端々で人間を助ける英雄的な犬が主人公の連続ドラマが毎週テレビで放映されていて、よく見ていた。犬なのに、何でこんなに頭がいいんだろう、何で悪人がわかるんだろうと、うそかもしれないけど本当であってほしい、と思っ  
て喜んで見ていた。

しかしここに登場する「名犬バリー」は実在する犬だったようだ（画像6）。スイスで多くの雪山遭難者を救出したにもかかわらず、間違えて射殺されてしまったという悲劇の犬が、日本でも話題になっていたのだろう。この絵は、も



▲画像6「名犬バリー」（的場朝二画）



▲画像7「ナイチンゲール」(的場朝二画)

ともと横長版のキンダーブックをさらに横開きにした大きさに描かれていて、内容のドラマチックさも手伝って、映画のスクリーンのような迫力を感じる。

次のページは、むしろ人間のほうが有名だ。すなわち子ども時代のナイチンゲールが、けがした羊飼いを優しく手当てしているという図である(画像7)。

それに続くページは、英雄とは言えないが、子どもがよく知っている話に登場する「名高い犬」たちが、

四コマ割りで紹介されている(画像8)。「花さかじいさんの犬」(右上)、「八犬伝の犬」(右下)、「イソップの中のよくばり犬」(左上)、「桃太郎さんの犬」(左下)。

### 犬とどうかわるか

犬の育て方を教えるページがある(画像9)。時計と反対回りに一〜六のコマに分かれている。

- 一、寒くないようおうちには わらをたくさん入れてやり
- 二、朝はドッグビスケット 晩にはごちそうどっさり 犬のごはんは一日に その二度だけでたくさんよ
- 三、夏は泥水のまぬよう たびたびきれいな水をやり
- 四、暖かいころ ぬるま湯で 行水させるも けっこうよ けれど子犬はいけません



▲画像8「お話にある名高い犬」(武田一路画)

五、毎日 わすれず 外へ出し 運動させて くださいな  
 六、 一日一度 からだじゅう かたいブラシで こじこじと お掃  
 除をしてやりましょう

七五調のおかし楽しい育児マニュアルだ。子どもなら、すぐにそらで覚えて節づけで唱えながら、世話をするかもしれない。近世の暗唱教育の名残ではあろう。子どもが自ら世話している図がほとんどだが、二番は母親（らしき女性）が、四番は父親（らしき男性）が中心に描かれている。都市部において主流になりつつあった核家族が、ペットを仲良く親も参加して大切に育てる、というイメージは、当時の理想型教育家族を具現化したものとも言えよう。

今の日本で「狂犬」に注意、という言葉をもとに耳にしなくなつた。国内の発症はほとんどなくなつたというが、昭和初期はそうではなかつた。野良犬が町の中にも多く、現代の「フシンシャ」という響きに似て、「キョウケン」も子どもには恐ろしく聞こえたことだろう。子を持つ親にとっては高度要警戒対象であつたに違いない。狂犬（病）に関する情報のページがある（画像10）。全体が六コマに分かれており、上の中央にリアルな「狂犬」のイメージが描かれている。「これは狂犬です。口をあげたまま、よだれをたらしています。目はよく見えません。人にも、木にも石にも、かみつきます。かわいそうに、病気にかかったのです。こんな犬にあつたら気をつけてください。」当時の子どもにとって真に必要な情報をわかりやすく伝えながらも、「かわいそうに、病気にかかったのです」



▲画像9 「イヌ ソダテカタ」 (的場朝二画)



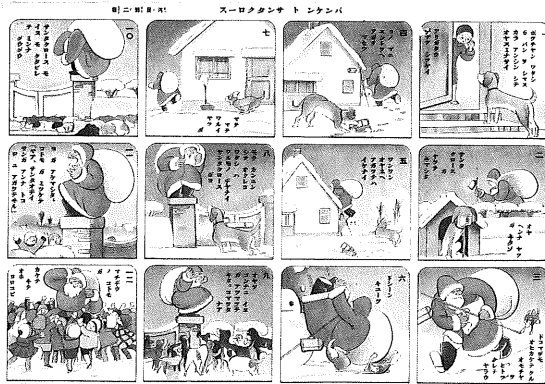
▲画像10「オノロシイ キョウケン」(的場朝二画)

という情も忘れないところに、保育的とも言える配慮が感じられる。狂犬の図以外のコマは、「もしかまれたら」どうするか、処置の手順が説明されている。

### 犬とロマン

狂犬病の重々しい雰囲気から解放してくれるのは、フィナーレの三ページ(附録も)。犬という存在が、子どものロマン、遊びの世界の中で、再び楽しく息づき始める。

河目悌二(画)による「番犬とサンタクロース」。細かいコマ割りといい、サンタクロースのユーモラスな雰囲気といい、一瞬、レイモンド・ブリッグスの「あわてんぼうのサンタクロース」を思い出す人が多いのではないか。一コマ目で、番犬が「ぼっちゃん。私が番をしますから、安心しておやすみなさい」と言うと、主人である男の子が「ありがとう。じゃあ失敬」と家に入る。そこへ、サンタクロースがやって来る。番犬の懸命の追跡や見張りの末、サンタクロースは朝まで家に入れず、結局、朝になって町中の子どもたちがサンタクロースに会えて大喜び、という筋書きだ(裏表紙には「いろいろなおもちゃの犬」として、ぬいぐるみや、張り子やゴムの犬、外国の人形などが描かれている)。



▲画像11「バンケン ト サンタクロース」(河目悌二画)

出色は、武井武雄（画）による「犬の王様」で、特別な色刷り附録になっている（画像12）。附録については、倉橋顧問の、幼稚園や子ども部屋に飾ってもよいような良質のものが、園の文化的環境の向上に必要なとの考えから、ほとんど毎号ついている。犬の王国のお城から犬たちの行列（しかも歩調などはバラバラの自由な行進）が続き、犬の王様を載せた素晴らしく格好のいい犬の御者。馬車ならぬ「犬車」を引く犬の背中に掛かった布には「ONE ONE」とある。

都会の過密化とマンション生活の増加、衛生観念の発達、少子化に伴う「安全」への過敏さ、大人の精神的余裕の喪失などによって、犬を飼いにくい世の中になっている。「死ぬこと」が生活の中のタブーになってきていることも関係しているだろう。獣医の中川美穂子は「動物は命があるからこそ、生きている時と死との落差が大きいからこそ、心を震わせるほどの体験を与えてくれます<sup>注2</sup>」と言う。昭和初期、死は、もちろん犬だけでなく、人間社会のすぐそばにあった。生死という問題を挟んで、犬と人間はより身近な関係にあった。

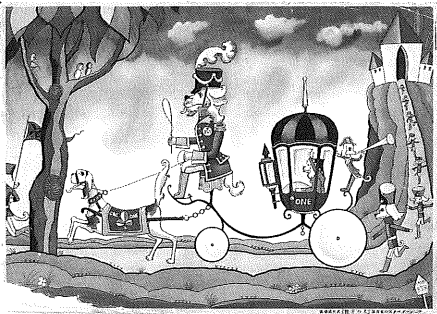
― 続く ―（引用は、現代文字・仮名遣い等に変えてあります。）

## 注

1 東洋幼稚園園長の岸邊福雄。海外の児童文化の導入に積極的で、当時、

倉橋惣三と共にキンダーブックの編輯顧問。

2 中川美穂子『動物と子ども』フレールベル館 一九八八年 p.105



▲画像12「犬の王様」（武井武雄画）